

世界エイズデー (World AIDS Day : 12月1日) に因んで —オリンピックとエイズ—



琉球大学大学院 感染症・呼吸器・消化器内科学 准教授 健山 正男

今年の9月7日にブエノスアイレスで開催された国際オリンピック委員会 (IOC) 総会で、2020年夏季五輪およびパラリンピックの東京開催が決定しました。日本国中が大きく盛り上がり、その余韻はまだ続いています。おそらく年末にかけても、今年一番の話題が何度も繰り返し放送されることでしょう。

さて、サブタイトルの「オリンピックとエイズ」は、その話題に無理に便乗したのでも、決して奇を衒(てら)ったものでもありません。実はこの両者には深い関係があり、ご紹介したいと思います。

東京の招致委員会のプレゼンでは、オリンピック憲章の第一章にあるオリンピックムーブメント(オリンピック運動)の重要性が強調されました。そのオリンピックムーブメントの公式サイトに『「HIVとAIDSの予防、および健康的な生活習慣の促進」』が掲示されています。これは2004年にIOCが国連合同エイズ計画(UNAIDS)と合意文章を締結して、エイズ対策のための特別キャンペーンを行うものです。具体的には各国のオリンピック委員会の代表やUNAIDS、国際赤十字・赤新月社、ユニセフの専門家、そしてそれぞれの地域の支援者の協力のもと、地域ワークショップを開いて、スポーツを通じたエイズの流行を抑えるための支援活動です。選手村の総合診療所でコンドームを無料提供することは、先述した「オリンピック運動」の一環として「エイズの流行、および健康を守るための行動への理解」を広げることを目指しており、世界的には毎回、かなりの話題となっています。

IOCとUNAIDSの協力関係は、2008年の北京五輪ではとりわけ大きな成功を収めました。

「安全にプレーし、HIV感染の拡大を止めよう。あなたの周りの世界を守る。そのための役割を果たそう。」という北京五輪のキャンペーンは、IOCと北京五輪組織委員会、UNAIDSが共同で企画し、実行したものです。キャンペーンで注目されたのは、五輪会場の建設現場で働く出稼ぎ労働者を対象にしたUNAIDSと民間のパートナーによるHIV啓発活動でした。UNAIDSは9つの国連機関と赤十字社やHIV感染者グループなどを動員し、HIV予防、および偏見、差別との闘いを呼びかけるために7千人の五輪ボランティアを養成しました。また約10万人のオリンピック・ボランティアの若者を対象にHIVと性の健康に関する情報を提供しました。選手村では、良質のコンドーム10万個、およびHIV予防や差別と闘いに理解を求めるリーフレット5万枚がパッケージにして配布されました。華やかなオリンピック競技のニュースの裏側で、日本では殆ど報道されることのなかったIOCと北京五輪組織委員会のこのような活動にただ驚かされるばかりです。

IOCが進めるアドボカシープログラム(権利擁護プログラム)も重要です。

IOCは「HIV感染者のスポーツへの参加は社会参加と支援の場を提供することになり重要である」との立場をとっています。HIV感染者のスポーツマン、スポーツウーマンの参加は、HIVを特別視せず、偏見と闘ううえで非常に貴重であるとも述べています。ムサ・ンジョコは31歳のHIV感染者の女性であり、2004年6月に南アフリカのケープタウンでオリンピック聖火リレーに参加しました。その数年前に南アフリカの女性としては初めて、自らがHIV陽性であることを公表しています。HIVとエイ

ズにまつわる偏見や差別により、様々な問題を抱えながらも沈黙を余儀なくされている感染者と女性たちの声を聖火ランナーとなることで代弁し、これを IOC と南アフリカ五輪組織委員会は強力にサポートしました。

近代オリンピックの父であるピエール・ド・クーベルタンによって提唱されたオリンピズムとは、「スポーツを通して心身を向上させ、さらには文化・国籍など様々な差異を超え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって理解し合うことで、平和でよりよい世界の実現に貢献する。」とされています。IOC は、このオリンピズムの精神にもとづき、公式ホームページで「オリンピック憲章がスポーツを人々に役立てるよう」求めていることから、国連のミレニアム開発目標に盛り込まれている「HIV とエイズ対策、および差別との世界的な闘い」に IOC は貢献する道義的な義務があると宣言しています。また、すべての人がこの闘いの中で、それぞれの役割を担う必要があり、私たちすべてが加わることを求めています。

オリンピックがこのように精神性の高い哲学によって開催されてきた歴史があることを知ったとき、私達、日本人がオリンピックの招致に成功したことは、あらためて感慨深く、そして名誉なことであると思います。そして同時に、オリンピック開催の準備は施設の建設と運営に関心が向きがちですが、クーベルタンが提唱したオリンピズムを私たち日本人の心に根付かす「草の根運動」も重要であることに気づかされます。

沖縄県では、この5年間、新規患者数は人口比で常に全国の上位を占めてきました。1987年以來、県内で診断された HIV 感染者数の累計は 240 人 (2013 年 6 月末集計) です。

一般県民はもとよりメディア、医療関係者においても HIV/AIDS への理解は、IOC の掲げる道義的義務と理念からみると、未だ充分でないのが実情のようです。

本稿が皆様の茶の間や職場で「オリンピックとエイズ」について、今一度、語られる機会となれば幸いです。

